

「国際研究集会派遣参加報告書」

京都大学文学学部・研究科 2013年 Catt Adam Alvah

【学習成果】

学会の参加者の多くはアメリカとヨーロッパ諸国の若手研究者で、新鮮な観点からの発表が目立った。インド・ヨーロッパ諸語の歴史言語学的研究は、やや保守的な手法を用いる傾向がある。しかし今回の学会では、統合論、形態論や音韻論の最新の研究成果と方法論を取り入れる発表が多くあって、とても刺激的だった。日本にいただけで、このような学界の変動を知る機会はないので、貴重な経験となった。

【海外での経験】

発表の合間に休憩時間が設けられ、ゆったりとした環境の中でアメリカとヨーロッパの研究者と話しをすることができた。また、每晚懇親会が開かれ、学会の参加者と交流し、友情関係を深めることができた。

【プログラム内容】

The Annual UCLA Indo-European Conference は、古代インド・ヨーロッパ諸語の歴史言語学的研究を中心とする学会の中でも特に伝統と権威のある学会である。その学会が毎年開いている会議の目的は、古代インド・ヨーロッパ諸語を比較言語学的手法によって、同系統に属する諸言語の共通の祖先である祖語（印欧祖語といわれる）を再建し、個々の言語が祖語の段階からどのような変化を受けて成立したのかを明らかにすることである。今年の学会のテーマは特になかったが、名詞と動詞体系、統合論や音韻論などに関する研究発表が行われた。古代インド・ヨーロッパ諸語は非常に複雑な体系を持ち、近年の研究によってその体系は次第に明らかにされつつあるが、多くの不明な点がまだ残されている。2日間にわたって、ヒッタイト語、古代ギリシア語、ラテン語、バルト・スラブ諸語、ケルト語、ゲルマン諸語、トカラ語や古代インド・イラン諸語など、様々な古代言語の観点からの研究発表が行われた。

【進路への影響】

研究発表の後に多くの研究者と話して、有意義なコメントと批判をいただいた。それを踏まえた上で、研究を進めたい。

【謝辞】

本研究発表を行うにあたり、研究助成を下さいました京都大学アジア研究教育ユニットに厚くお礼申し上げます。大変有意義な学会となりましたことをここにご報告し、今後とも研究に益々邁進して参ります。今後ともよろしくお願い申し上げます。